2006年5月10日発行（毎月1回10日発行）●SJ398号
Monthly The Safety Japan
Sj
人とクルマのいい関係をめざして

5
2006 MAY
●編集室：〒107-8556 東京都港区南青山2−1−1
本田技研工業株式会社
安全運転普及本部内
電話 03(5412)1736
●編集人：河野光彦
●年間購読料：1200円（定価1部100円・消費税込）
※郵便振替　口座番号：00170-7-173273
※加入者名：㈱アストクリエイティブ
安全運転普及本部係

今月のスポット

そもそも安全は存在しません。常に存在するのは危険です。危険をいかに的確に予測し、確実に防止する努力をするか、対応できる状況にしておくかをこれからも継続して考えていただきたい。

（特集より）

CONTENTS

特集：若年ドライバーへの教育―交通教育センターに求めるもの ……❶
自分のめざす運転の形は何ですか？
TRAFFIC ADVICE ……❹
●セコム(株)・安全運転路上診断／入社前に、自分の運転を振り返り、課題を発見する
SAFETY REPO ……❹
●Enjoy Honda SUZUKA 2006／さまざまな体験を通じて楽しみながら安全を学んでもらう
NEWS REVIEW ……❹
●平成17年度国際交通安全学会研究調査報告会ならびに学会賞贈呈式
●活動短信／交通教育センター4月
OPINION ……❺
●福田敦・福田トウェンチャイ／ヒヤリ地図づくりの普及を通じて、タイにおける交通安全施策を支援
HOW TO LEAD ……❺
●交通教育センターレインボー埼玉／川島中学校・交通安全教室
自転車の交通事故を再現して、どうしたら事故に遭わないかを考えてもらう
DOCUMENT EYE ⑲⑤ ……❻
●朝の通勤時間帯に地方都市の信号機のない交差点で車両の一時停止状況を観察する

特集：若年ドライバーへの教育―交通教育センターに求めるもの

自分のめざす運転の形は何ですか？

企業や学校では、新入社員や学生などの若者を対象にした安全運転研修で交通教育センターを利用している。参加する若者たちは、交通教育センターでの研修で何を学び、何を期待しているのだろうか？カリキュラムへの要望、普段の運転からの要望など、若者たちの意見を中心に、若年ドライバーへの教育のあり方を、企業と高等専門学校の安全運転研修の現場から考える。

鈴鹿サーキット交通教育センター（三重県鈴鹿市）での鈴鹿工業高等専門学校の二輪四輪安全運転講習会

交通教育センターレインボー埼玉（埼玉県比企郡川島町）での小島電機工業(株)の新入社員車両実車研修

交通教育センターレインボー浜名湖（静岡県浜松市）での新日工業（株）の新入社員安全運転研修

春、4月。桜舞うなか、全国7ヵ所の交通教育センターでは企業の新入社員への研修が多数行われる。企業、そして交通教育センターは新入社員研修をどのように位置づけているのだろうか。

4月7日、交通教育センターレインボー浜名湖で新入社員安全運転研修を実施した新日工業（株）（本社：愛知県蒲郡市）事業管理担当取締役・岡田忠久さんは、「クルマとはどんなものか、交通事故はどうして起きるのか、身をもって体験する。そして、クルマの限界を知り、運転を通して自分の性格を認識し、安全に対する意識をさらに高めて、自動車業界の一員として自分の今後の安全運転を考えてもらうこと」と語る。交通教育センターレインボー浜名湖の小川善徳・研修教育課課長は、「研修は誰のためにやるのか」と新入社員に問いかける。「日本には、まだまだ悲惨な事故がたくさん起きています。みなさんが、当事者や被害者になる可能性もあります。事故は自分や相手の人生を簡単に変えてしまいます。研修は、みなさんの将来のためであり、家族のためでもあります。そのために安全運転に真剣に取り組む姿勢・考え・行動が重要になります。それは結果的に会社の将来にもつながります。つまり自分のためであるということをしっかりと考えて、安全に対する意識を頭の中で確立していただきたい」。研修は、受講者が自分のために、安全意識を身につけることをめざして行われていると言える。

若者を中心とする新入社員研修がどのように行われているのか、4月14日、交通教育センターレインボー埼玉を訪ねた。この日は小島電機工業（株）（本社：東京都北区）の新入社員15名を対象にした本社トラックを使った車両実車研修の2日目であった。ほとんどの社員がこの研修で初めてトラックのハンドルを握る。午前10時30分より実技がスタート。乗車する前に、トラックのまわりを一周し、積荷等のはみ出し、周囲の安全、ミラーの出し忘れなどを確認。「上よし、下よし、ミラーよし」などと声を出しながら点検した後、乗

交通事故を起こさないためにはどうしたらいいか、これからの運転に活かせる経験をする

写真左上／今年から新たに取り入れられたタイヤチェーンの脱着体験
写真右上／インストラクターが狭い道をスムーズに走行するためのポイントをわかりやすく説明
写真右下／2日目の午後、小島電機工業（株）の新入社員は狭路を走行する練習を繰り返した

入社員たちが、信号が点灯したと思った位置は実際に点灯した位置より平均して9mも先であった。その結果に新入社員たちは、一様に驚く。インストラクターは、信号の点灯を目で認知してから反応するまでに時間がかかることを説明し、合わせて車間距離の確保についても数字をあげて具体的に話をすると、受講者は納得した様子であった。この後、タイヤチェーンの脱着、ブースターケーブルのつなぎ方を体験した。

昼食・休憩をはさんで午後2時からは、車両感覚訓練（車幅、車輪感覚）。S字、クランクなど狭路をトラックで走行する練習だ。最初はカーブを曲がることができず、コースに設置されたパイロンに接触する人が見られた。途中、インストラクターが狭路での模範走行を見せて、アドバイスする。その後、再び練習を始めると、1人もパイロンに接触することなく走行できた。引き続き、後退訓練（車庫入れ、縦列駐車）が行われ、午後5時、2日間の研修が終わった。閉講式では全員に修了証が授与され、閉講の挨拶では、交通教育センターレインボー埼玉の玉川正智所長が、「レストランでは、『忙しい時ほど、ゆっくり歩け』という言葉があるそうです。運転している人も同じで、時間がない時ほどしっかり止まる、確認も意識してしっかり行ってほしいと思います」と、改めて安全意識の向上を強調した。

狭い道では、無理をせずに止まることを学ぶ

修了証を手にした窪田雅昭さん（22歳）は、「トラックの運転は初めてですが、乗用車の運転に慣れていたので、運転のための研修はやらなくてもいいと思っていました。普段は狭い道でもどんどん進んでいくような運転をしていましたが、車両感覚訓練での狭路走行で、少しでもぶつかりそうになったら、トラックは無理をせず止まって戻ることなど、乗用車以上に気をつけなければいけないと、研修から学びました」と語る。新部卓哉さん（22歳）は、大学時代にトラック運転のアルバイトをしていた経験から、今回の研修は「すごく大切だ」と思ったそうだ。「アルバイトでの運転は1年半以上前なので、すべて初心に返って気をつけたいと思って研修に臨みました。研修では、空走距離や制動距離を実際に目で見て確認できたこと、信号の点灯に反応するまでに時間がかかるなど、公道ではできないことが体験できて良かったと思います。また、2人で1台の車に乗るので、他の人の運転も見ることができたことも良い経験になりました」。新部さんが課題としてあげるのは、公道での危険をいかに予測できるか、時間に追われた時に心理状態を平常に保てるかということだという。

運転歴7年の松本直也さん（25歳）は、「研修には堅苦しいイメージがありましたが、会社の看板を背負って、どこの誰だか知られて運転するという話から研修が始まったので、安全運転に対して深く考えるきっかけになりました。一番印象に残ったことは、自分の車間距離が必要な距離より短かったことです。もし、前方を走るクルマが突然止まったらぶつかってしまう距離だったので、今までの自分の運転を反省しました」と言う。研修への要望では、「もっと乗車して練習する時間があれば良かった」というのは窪田さんと松本さん。今後やってみたいと思う研修内容については、新部さんが濡れた路面でのブレーキングを、松本さんが雪道での緊急時の対処法をあげた。窪田さんは、オイルや部品など消耗品の交換時期など点検の仕方についてより詳しく知りたいそうだ。

安全運転とは何かを体験する

小島電機工業（株）が新入社員車両実車研修で、交通教育センターレインボー埼玉を利用するようになってから、今年で4年目になる。同社管理本部総務部係長・佐藤公紀さんは、「新入社員の運転スキルが年々低下してきていると感じており、また、社内の交通事故も若年層の占める割合が高く、危機感がありました」と振り返る。交通教育センターの研修について、その内容もさることながら、インストラクターの姿勢や態度が新入社員にとって参考になると、佐藤さんは評価している。「入社後は、学生時代のような受身では困るので、大きな声を出す、自分から挨拶をするなど、インストラクターの立ち居振る舞いから刺激を受けることで積極性も身につけてほしい」と考えているからだ。研修内容については、現場（営業所）の声を受けて取り入れてもらうことも行ってきた。今年から、タイヤチェーンの脱着とブースターケーブルのつなぎ方を新たに取り入れた。「やったことがない」「出来ない」という新入社員がいるという現場の声を反映した形だ。「今の研修内容が最終形ではなく、現場からの要望や事故の発生状況によって教える内容は変わっていく」と考える佐藤さんにとって、こうした現場や研修を受けた新入社員の声が大事になっていくと思われる。

新日工業（株）の新入社員安全運転研修では、より安全な運転者になるために、危険予測など安全運転に必要な知識と心構えについての講義を受けた

機工業（株）と違って、こちらは業務で運転する機会は少ないため、通勤やプライベートでの安全運転を学ぶ。研修は、午前9時30分からの開講式に続いて、まず座学『より安全な運転者になるためには』である。鈴木隆司インストラクターが、「念頭に置いてほしいことは、『安全運転研修』だということです。安全運転とはどんな運転か、今日1日かけて答えを探してください。今日の研修では、危険を安全に体験していただきます。道路で実際に起きてはいけないことを体験することで、実際の道路で起きたらどうなるのか、起こさないためにはどうしたらいいのか、これからの運転に活かせる経験をしていただきます」と、研修の目標を示す。続

正しい運転姿勢で、正しいハンドル操作を行うことが、緊急時に素早い対処ができることを実際に体験

低μ路コースを使ってすべりやすい路面での急ブレーキを体験する新日工業（株）の新入社員

特集：若年ドライバーへの教育―交通教育センターに求めるもの

いて、「学生の時の運転と社会人としての運転へ、見方を変えて違った運転の鍵を探してください」と述べ、「自分のめざす運転の形は何ですか?」と、新入社員に問いかけた。

この後、実技に入り、①静的実技（日常点検、発炎筒の使用法、死角の確認など）、②慣熟走行と狭路走行、姿勢・ハンドル操作の確認などで午前の研修が終わった。昼食・休憩をはさんで、午後は、③シートベルト、エアバッグ体験、④反応体験、⑤クルマの危険特性体験と実技が続いて、午後3時30分に座学「まとめ・アドバイスシートと今後の運転方法」に入った。

まず各自の運転結果を記したアドバイスシートが配布された。「不確認・不注意は誰でも起きます。自分の運転能力を理解し、どのようにすれば事故を防げるのかを意識し、今後の運転に活かしてください」と、鈴木インストラクターが補足する。まとめとして、研修での自分の車間距離と停止距離を確認し、人身事故で最も多い追突事故、出会い頭事故を防ぐ運転を各自が検証した。最後に「自分のめざす運転の形は何ですか?」という、朝の座学での質問に戻って考える。制限速度を守る、車間距離を保つ、死角の大きさを見逃さない―つまり危険な状況をつくらない運転をすることであると確認された。鈴木インストラクターから、「そもそも安全は存在しません。常に存在するのは危険です。危険をいかに的確に予測し、確実に防止する努力をするか、対応できる状況にしておくかをこれからも継続して考えていただきたい。また、思い込みやあせる気持ちも危険であることを忘れずに運転してください」とアドバイスし、研修のまとめをした。

6名の新入社員はいずれも、この研修を先輩などから聞いて、「楽しみにしていた」と言っていたが、修了証を手にした表情からは期待どおりの内容だったことがうかがえた。竹内伸也さん（20歳）は、「車間距離など、自分が思っていたことと違う結果が出て、現実と想像していたことが違うことがよくわかりました。いざという時の心構えができたように思います。運転に慣れが出てきたところだったので、これまでの運転を客観的に振り返るいい機会になりました」と語る。普通自動車免許を取ったばかりの都築紅葉さん（18歳）は、「運転はどちらかといえば苦手ですが、なにかを身につけて帰りたいという気持ちで来ました。思っていた以上に体験することが多く、勉強になりました」と話す。想像していた以上に楽しかったというのは徳升広太さん（21歳）。「一番印象に残っているのはすべりやすい路面での急ブレーキ。思っていたことと違った体験ができた」そうだ。壁谷慶子さん（18歳）は、「クルマが自分の予想に反した動きをしたのでとても驚きました」と、笑う。笠原由樹さん（22歳）は「すべりやすい路面で急ブレーキをかけると、こんなにすべるのかとびっくりしました。普段できないことを体験できたので、これからの長い人生に活かせると思っています。参加型で、少人数での体験だったので想像以上の内容でした」と、想像以上を連発する。閲目諒（くじめ）さん（18歳）は、「シートベルトを着用していない状態での急ブレーキ体験が印象に残りました。これからは後席でもシートベルトが大切だということをクルマに乗る時に思い出します」と言う。

新日工業（株）の新入社員安全運転研修は、今年で5回目となる。同社取締役の岡田忠久さんは、「業務で運転する機会はあまり多くはありませんが、ほとんどの社員が通勤にクルマを利用しています。そのため、安全運転教育が必要なのです」と、『安全第一』を強調する。この研修を含め交通教育センターでの安全運転研修を経験した社員は全体の約3割に達するという。そうした努力の成果も現れつつあり、業務、通勤、私用を含めた交通事故発生件数は、2004年16件（加害7件・被害9件）から、2005年は一挙に4件（加害1件・被害3件）に減少した。しかも20代、30代の社員の事故はゼロであった。「1人でも多くの社員に、この研修を体験してもらう機会を作りたいと考えています。毎年秋には、交通事故や違反を起こした社員を対象にした安全運転研修も開催しており、昨年からは体験希望の社員も募集し、実施しています」と意欲を燃やす。

免許を取って、運転に慣れてくる2年目が危ない

鈴鹿サーキット交通教育センターでは4月22日、鈴鹿工業高等専門学校の二輪四輪安全運転講習会が開かれた。5年制の同校は二輪あるいは四輪で通学を希望する3年生以上の学生を対象に、この講習会を修了することを通学許可の条件としている。毎年春と秋の2回開催され、すでに15年以上続いているという。この日は54名の学生が受講。四輪講習会には女性6名を含む24名が受講した。通学許可の有効期間は4月から3月の1年間のため、新学期になって許可を更新したい学生は改めて講習会を受講することになる。そのため5年生の受講者のほとんどが今回で2回目となる。通学許可などを担当している同校教員の冨岡巧さんによると、「講習会を行う以前は無茶な運転をする学生もいました。免許を取って2年目くらいの慣れてきた頃が危ないので す。学生が普段の運転ではできないことを体験して、『危険』というものを学ぶ機会として講習会を始めました。ここ数年は通学中の人身事故は起きていません。これまで定期的に安全運転講習会を継続してきた効果だと思います」という。

講習会は午前9時からの開講式で始まった。インストラクターのオリエンテーション後、コースに出て、二輪と四輪に分かれ、四輪は2人1組になってまず車両点検。次にスラローム。S字、クランクでの曲がるトレーニングを行う。続いて、濡れた路面でのブレーキング。ABS（アンチロック・ブレーキ・システム）を装着していない状態のクルマでのブレーキングと、ABSを装着したクルマでのブレーキングを50km／hと60km／hでそれぞれ体験。インストラクターが1台ごとに「もっとブレーキを踏み込んでください」「ハンドルを握る手は9時15分の位置にしてください」といったアドバイスを出す。最後が反応制動。40km／h前後で走り、信号の合図でブレーキを踏む。空走距離と制動距離を確認し、車間距離をあけて走行することを認識させる。午後1時に講習会は終わった。

四輪の講習を担当した鈴鹿サーキット交通教育センターの池田正樹インストラクターは、「講習では、技量以上に、周囲に対する注意をポイントに伝えています。免許を取ったばかりの時は不安で、周囲をよく見ますが、運転に慣れて自信が出てくると、まわりを見なくなります。運転がうまくても、前ばかり見ている人は問題です。この講習では、周囲の安全を確認してスタートする、まわりの状況に注意しながら走ることを基本にしています」と話す。

鈴鹿工業高等専門学校の学生たちは、濡れた路面でABSの効果を体験した

反応制動体験では、空走距離と制動距離を確認した

二輪で通学を希望する学生は、バイクでの講習を受けた

運転に慣れてくる免許を取って2年目という3人の5年生に、講習の感想などを聞いてみた。3人はいずれも19歳、今回が2回目の講習会だ。免許取得1年半の和田真さんは、「昨年受けたので、やることは分かっていましたが、もう1度急ブレーキなどを体験してみて、スピードを抑えることが大事であることなど、さらに安全意識が高まった」そうだ。「実は3日前に自分のクルマのラジエーターが壊れてしまって、点検が大事だと分かったので、点検をしっかり覚えようと思ってきました。昨年も点検を教えていただいたのですが、けっこう忘れてしまっていました。今日はしっかり覚えました」と笑みをうかべる。同じく免許を取って1年半の坂倉功晃さんは、昨年は急ブレーキの体験が強く印象に残ったという。「普段はめったに急ブレーキを踏むことはないですから。前回から1年たって自分でも運転に慣れてきた時が危ないと思っていました。朝はぎりぎりまで寝ているので、学校に遅刻しないように急いでしまい、スピードを出しすぎていると思うことがあります。危ないかもしれないと分かっていても、怖さを忘れてしまい、スピードを抑えられないことがあるので、今日は復習をするつもりで来ました。急ブレーキのトレーニングで、自分が止まれる距離がわかったので、これからはスピードを抑えていこうと思っています」と話す。

昨年の講習会は免許を取って1ヵ月もたたない時で、急ブレーキどころか、「スピードを出すのが怖かった」というのは、新海由佳さんだ。「普段の運転では、前方で急に止まるクルマや、ブレーキをチョコチョコとかけるクルマが気になるので、スピードを出しすぎない、車間距離を十分にとることを課題と思って、受けました。苦手なのは狭い道で、大きなクルマが対向してきた時に、どのように対応したらいいのか。今はとりあえず止まって、相手の動きを待ちますが、この講習で教えてもらえるとうれしい」という。

交通社会に出て間もない若者たちは、現実の場面で直面している課題を解決するための安全運転研修を望んでいる。